

カルナップとクワイン

——何が争点だったのか——

中村 正利

戦後分析哲学の最も重要な文献のひとつに挙げられるのが、W. V. クワインの論文「経験主義のふたつのドグマ」である。この論文の目的は、論理実証主義の基本的教義のうちのふたつ（それらをクワインはドグマであるとみなした）を批判することにあった。

クワインの哲学は論理実証主義を母体に持つ。彼はもともと、論理実証主義の思想を最も厳密に展開した、ウィーン学団の中心メンバー、R. カルナップの哲学の信奉者であった。だが、彼はその後、カルナップ哲学（そして論理実証主義）に対する最も鋭い批判者⁽¹⁾となってゆく。そのようにして、彼は自らの哲学を形成していったのである。

論理実証主義の教義の中には、論理実証主義それ自体の根本的精神（科学主義・物理主義・経験主義）と折り合わないものがある、とクワインは考えた。ある意味では、彼は、そうした教義を否定することによって、論理実証主義的な精神を徹底したともいえる。彼は、論理実証主義の最も鋭い批判的継承者なのである。カルナップとクワインの対立点も確かに鮮明であるが、両者が共有しているものもまた、非常に多い。クワインの哲学は、常にカルナップの哲学との対比のもとで理解されるべきであろう。

クワインが最も激しく攻撃したのが「分析性」という概念であったことは、よく知られている。カルナップらの擁護する教義の中でクワインがドグマとみなしたもののひとつは、分析的真理と総合的真理との間にはっきりとした境界線を引くことができる、という考えであった。分析的真理は、言語的真理・ことばの意味のみによる真理などと特徴づけられる。しかし、クワインは、そもそも、ことばの「意味」なる概念を認めない。従って当然、「ことばの意味のみによる真理」などといったものも彼には認められないのである。

本論文の目的は、カルナップとクワインの「分析性」をめぐる論争の争点がどこにあったのかを具体的に明らかにすることである。両者の間のやりとりを追うことで、その論争の焦点がどこに絞られていたかを浮き彫りにしたいのである。そうした作業によって、三つの点が明らかになる。第一は、彼らの間のもともとの争点が「人工言語」にあった、ということである。第二は、人工言語をめぐる論争ははっきりした決着をみないまま、自然言語を舞台にした論争へと移行した、ということである。第三に、こうした論争の果てに、クワインの「翻訳の不確定説」が位置する、ということである。

一
八

翻訳の不確定説はクワインの主著『ことばと対象』に登場し、その後、現在に至るまで、活発な議論的となり続けてきた。カルナップとクワインの論争を追ってゆくとはっきりするのは、この翻訳の不確定説もまた、もとはといえば、彼らの論争から直接産み落とされたものだということなのである。

以下では、上記の三つの点を、順番に明らかにしてゆくこととしよう。

1. 人工言語

1-1. カルナップの意味論

まず、クワインが批判しようとしたカルナップの立場がどんなものであったかをみるとしよう。当初、カルナップは、人工的に構成された言語の文が持つ構文論的な性質のひとつとして、「分析性」という概念を定義しようとした。しかしそののち彼は、この概念は構文論的にではなく、意味論的に定義されるべきだと考えるようになった。こうした立場の変更は、タルスキが真理概念を意味論的に「定義」したことからの影響によるところが大きい。

ここで、三つの問題を提起することができる。人工言語において分析性概念を意味論的に定義することで、カルナップは一体何をしようとしていたのか？カルナップのいう人工言語とはどのようなものなのか？実際に「分析性」はどのように定義されるのか？

第一の問い——カルナップの目的——に関しては、一言でいって、彼の目指していたことは「**説明 explication**」である、ということができる。カルナップは、「日常生活において、ならびに、科学や論理学の発展の初期段階において使用される曖昧な概念や十分に正確ではない概念をより正確にする仕事、あるいはむしろ、それを新しく構成されたより正確な概念によって置き換える仕事は、論理的分析と論理的構成の最も重要な仕事に属している」と述べる。説明とは、まさにこの仕事に他ならない。

「**分析的真理**」は、これまで、「**純粋に論理的理由に基づき、ただ意味のみに基づき、偶然的な事実から独立した真理と特徴づけられてきた**」。カルナップが説明しようとする「曖昧で正確ではない」概念のひとつがまさにこの「**分析性**」という概念である。この概念——被説明項——にとって代わるのにふさわしい「より正確な概念」を、満足のいくような形で「**新しく構成**」すること、もとの概念の内容の本質的な部分を受け継ぐように、しかもその概念よりはるかに厳密な形で、新しい概念を定義すること——これが、カルナップの引き受けた課題である。

カルナップによれば、分析性という概念にとって換わるべきより正確な概念は、厳密な規則に支配される人工言語を相手にした場合のみ定義されうる。分析性という概念に対する「**説明項**」となる新しい概念は、「**L-真**」と名づけられた。

要するに、カルナップによれば、「**分析性**」という概念は、そのままでは満足のいくものではないが、「**説明**」によってその厳密で科学的なヴァージョンを獲得することができるものであり、従って擁護可能である。人工言語に対して意味論的に定義されることによって、申し分がなく、満足のいく分析性概念を手に入れることができる、というわけである。

そこで、次に、カルナップのいう「人工言語」とはどのようなものであるかをみるとしよう。

意味論的人工言語は、明示的な意味論規則によって完全に規定される。意味論規則は、通常、形成規則 (rules of formation)、指示の規則 (rules of designation)、真理の規則 (rules of truth) という、三つの規則からなる。ここに、そうした人工言語の一例を提示しよう。

意味論的体系 S_3

(1) 形成規則

- ・ S_3 において使用を許される記号の列挙と分類
三つの個体定項；‘a’，‘b’，‘c’、二つの述語定項；‘P’，‘Q’
論理定項、括弧；‘ \neg ’，‘ \vee ’，‘(’，‘)’
- ・ 文の定義（ S_3 において文として認められる記号列の規定）
 S_3 における表現 ϵ が S_3 における文（ α ）である
= α ϵ が次の形のうちのどれかである
 $\text{pr}(\text{in})$, $\neg(\alpha_i)$, $\alpha_i \vee \alpha_j$

(2) 指示の規則

- ・ 個体定項に関する指示の規則； S_3 における個体定項が S_3 においてある個体 x を指示する = α 次のうちのいずれかである
 - ・ 個体定項が ‘a’ であり、 x がシカゴである
 - ・ 個体定項が ‘b’ であり、 x がニューヨークである
 - ・ 個体定項が ‘c’ であり、 x がカーメルである
- ・ 述語定項に関する指示の規則； S_3 における述語定項が S_3 においてある性質 x を指示する = α 次のうちのいずれかである
 - ・ 述語定項が ‘P’ であり、 x が大きいという性質である
 - ・ 述語定項が ‘Q’ であり、 x が港を持つという性質である

(3) 真理の規則（ S_3 の文がどのような場合に真であるかの規定）

- α_k が S_3 において真である = α 次の三つの条件のうちのどれかが満たされる
- ・ α_k が $\text{pr}(\text{in})$ という形をしており、しかも、 in によって指示される個体が pr によって指示される性質を持つ
 - ・ α_k が $\neg(\alpha_i)$ という形をしており、しかも、 α_i は真ではない
 - ・ α_k が $\alpha_i \vee \alpha_j$ という形をしており、しかも、 α_i と α_j のうちで少なくとも一方が真である

（ここで、「 α 」「 pr 」「 in 」はそれぞれ、 S_3 における文、述語定項、個体定項に対するメタ言語での表現である。また、論理定項と括弧に関しては、 S_3 の記号をそのままメタ言語でも用いた。）

もちろん、この S_3 のような簡単な言語だけではなく、もっと複雑な言語を構成することもできる。人工言語をどのようなものにするかは、その言語を規定する以上のような三つの意味論規則をどのようなものにするかに依存している。

次に、カルナップがこうした人工言語に対して「L-真」という概念をどのように定義したかをみてゆこう。

「分析的真理」は、世界の事実がどうなっていようと成り立つ、アブリオリで、確実で、必然的な真理と考えられてきた。それはまた、言語的真理・ことばの意味による真理であるともされてきた。従って、「L-真」であるとされる文も、その文が真であることが、言語外の事実とは無関係に、ただその文の意味だけから確立されるようなものでなければならない。他方、人工言語においては、文の意味は意味論規則によって決定される。従っ

で、「L-真」という概念が「分析的」という概念に対する適切な解明項となるためには、「L-真である文」という表現が、意味論規則だけから真となる文を指すものとなっていればよいのである。以上のことに基づいて、カルナップは、「L-真」という概念の定義が満たすべき条件を次のように定式化する。

文 a_i が意味論的体系 S において L-真であるのは、この文が真であるということが、(言語外の) 事実にかかわることなく、ただ体系 S の意味論規則だけ⁽⁶⁾に基づいて確立できるような仕方⁽⁶⁾で、 a_i が S において真であるとき、そしてそのときに限る。

例えば、 S_3 の文「 $P(a)$ 」が真であるか否かは、 S_3 の意味論規則だけではわからない。この文が真であるか否かは、シカゴが大きい⁽⁷⁾か否かを実際に観察することによってしか、つまり、シカゴの大きさに関する「言語外の実事」を参照することによってしかわからないのである。しかし、「 $P(a) \vee \neg P(a)$ 」という文についてはどうか。この文は、真であることが S_3 の意味論規則だけから確立される文である。それは次のようにしてである。まず、「 $P(a)$ 」が真であるとしてみよう。この場合は、「 \vee 」を含む文に関する真理の規則から、文「 $P(a) \vee \neg P(a)$ 」が真であるとわかる。次に、「 $P(a)$ 」が真ではないとしてみよう。この場合には、「 \neg 」を含む文に関する真理の規則から「 $\neg P(a)$ 」が真であることになり、さらに、「 \vee 」を含む文に関する真理の規則から文「 $P(a) \vee \neg P(a)$ 」が真であるということになる。「 $P(a)$ 」は真であるか真ではないかのどちらかなのだから、「 $P(a) \vee \neg P(a)$ 」はいずれにせよ意味論規則だけに基づいて常に真となる文である。従ってこの文は L-真なのである。

だが、上で述べた条件は、「L-真」という概念の定義が満たすべき一般的条件であって、この概念の定義そのものではない。この条件を満たすような形で、実際に「文が S_3 において L-真である」ということを定義する必要がある。そのように具体的に定義をする際の手法のひとつとして、カルナップは、「状態記述」という概念を用いたものを提案している。

しかし、たとえ状態記述を用いた方法などによって「 S_3 における L-真」の定義が得られたとしても、この定義は、あくまで、文が S_3 において L-真であるということの定義に過ぎない。その意味で、目下手に入る定義は、 S_3 という特定の言語に関する意味論、すなわち、「特殊」意味論における定義である。では、どんな意味論的体系にも適用できる一般意味論はどういうものになるのだろうか。「L-真」という概念は、その一般意味論の中で、どう定義されるのだろうか。カルナップは、一般意味論の重要性を強調している。しかし、彼は、一般意味論がどういうものになるかについては、いくつかのスケッチを与えているのみで、この問題はこれからの研究課題であると述べている。

1-2. 「経験主義のふたつのドグマ」

カルナップの哲学に深く傾倒していた若きクワインは、1934年に、カルナップの『言語の論理的構文論』に関するレクチャーを行う。これは、当時のカルナップの立場（構文論の立場）をクワインなりに解説したものであった。この講義を土台にして執筆されたのが、彼の1936年の論文「規約による真理」である。クワイン自身の言い方を借りれば、こ

の論文は既に、カルナップ哲学に対する彼の「背教の種」であつた。⁸

カルナップは、国際会議のために1939年にハーヴァードを訪れ、そこにしばらく滞在する。その滞在中開かれたカルナップのセミナーにおいて、クワインは、タルスキとともに、分析性という概念に対する疑念を表明する。クワインが公の場でそうした疑念を表明したのは、知りうる限りこれが最初である、とクリースは述べている。この後、クワインは、カルナップとの意見の相違を何とか調停しようとする。その様子は、両者の間で交わされた多くの書簡に残されている。しかし、両者の対立は簡単に解消されうるようなものではなく、むしろ根本的なものであることがかえって判明してくるのである。カルナップは、書簡という形では書き送りきれない自分の立場を論文にし、それはどんどん長くなって、一冊の本となった。これが『意味と必然性』(first edition 1947)であり、そこでのカルナップの主張の一部を我々は既に概観した。

クリースの推測によれば、クワインが「分析性」という概念に最終的に見切りをつけたのは、1947年の夏である。そして、彼が、公然とカルナップに反旗を翻したのが、論文「経験主義のふたつのドグマ」(初出、1951年)なのである。⁹

1-2-1. クワインの批判

「経験主義のふたつのドグマ」の目的のひとつは、分析性という概念の批判(あるいは、分析的真理と総合的真理との間にはっきりとした境界線を引くことができるという考えの批判)にある。「ふたつのドグマ」において、クワインは、「分析性」という概念を理解可能にするような、この概念に対する満足のいく説明を与えることができるか、と問う。この問題に対するクワインの答えは、一言でいって、「そのような説明などなく、分析性という概念はどのみち理解できない」というものである。それにともなう、クワインはこの論文の第4節で、「人工言語に訴えることによって分析性という概念を明らかにしようという試みは、この概念を理解するためには何の役にも立たない」ということを導き出す議論も行っている。ここが、カルナップとの直接対決の部分である。

「ふたつのドグマ」第4節における議論のうちでも、カルナップの立場とはっきり対立する論点をまとめると、以下のようになる。カルナップによれば、人工言語においてある文が分析的であるのは、その文がその言語の意味論規則だけから真とされる場合であつた。クワインの批判は、「分析性」という概念を説明するために「意味論規則」なるものに訴えても全く無益だ、というものである。なぜなら、「意味論規則」という語は、「分析性」という語と同じくらい不明瞭だからである。(目下の議論において実質上問題となるのは、意味論規則の中でも、「真理の規則」である。従って、ここでの議論において「意味論規則」というときには、真理の規則のことが念頭におかれている。)

意味論規則とは何か? 「ある特定の人工言語、例えば先の S_3 という人工言語、の意味論規則とは何か?」とたずねられたのであれば、答えは簡単であって、「 S_3 の意味論規則」として挙げられている文を具体的に示せばよい。「ある文がある特定の人工言語、例えば S_3 、において分析的であるとはどういうことか?」とたずねられた場合も、同様に、明瞭な答えを与えることができる。それは、その文が S_3 の意味論規則だけから真となるということである。「 S_3 の意味論規則」という表現が何を指すかははっきりしているので、「ある文が S_3 において分析的である」とはどういうことかに関するこの説明は、確かに明瞭で

ある。しかし、「(人工言語の) ある文が分析的であるとは一般的にいつてどういうことか?」と問われて、「それは、その文が意味論規則だけから真となるということだ」と答えても、これは明瞭な答えになっていない。この答えで言及されている「意味論規則」とは、どの特定の意味論規則を指すのでもなく、意味論規則一般を意味するのではなくてはならないが、一般に意味論規則とは何かということは、まだ明らかになってはいないからである。

そこで、我々は、意味論規則とは一般的にいつて何であるかということを明確にしなければならない。では、一般的にいつて、意味論規則とは何なのか? この問いに答えを与えることはできないであろうというのが、クワインの批判の核心である。「 S_1 の意味論規則とはかくかくである、 S_2 の意味論規則とはかくかくである、…」というように、個々の特定の人工言語の意味論規則とは何かをひとつひとつ明らかにしてみても、一般に意味論規則とは何かが明らかになるわけではない。では、任意の文に関して、それが意味論規則を述べる文であるのかそうでないのかを見分ける一般的な方法はあるか? そのようなものはないのである。「意味論規則を[他の文から]区別可能にするのは、明らかに、それが『意味論規則』という見出しのもとにあらわれているという事実によってのみである。そうすると、この見出しそれ自体は無意味である」¹⁰。

クワインは、意味論規則は公準に似ていると考えている。数学(でも何でもよいが)のある体系における真理を全部目の前にひろげておいて、「この中のどれが公準か?」と問われても、答えを与えることはできない。「あらかじめ公準と決まっているような真理などない」と応じるしかないであろう。本質的に公準であるような真理がないのと同様、本質的に意味論規則であるような文もないのである。

クワインが欲しているのは、特定の人工言語に適用される分析性概念ではなく、少なくとも人工言語一般に適用可能であるような分析性概念である。後者を「人工言語の意味論規則」という概念に訴えることによって説明するのならば、何よりも「意味論規則」とは一般的にいつて何であるのかが明らかにされねばならない。しかしそれは不可能であろう、というのが、クワインの論法である。

1-2-2. カルナップの返答

我々は、以上のようなクワインの批判に対するカルナップの直接的な反応を、彼の手稿“Quine on Analyticity”から知ることができる。カルナップの返答を、彼らの対立点がはっきりするように再構成してみよう。

まず指摘すべきは、人工言語における分析性概念は厳密に規定できるが、自然言語を相手にした分析性概念は、厳密な議論に耐えない、不十分で満足のいかないものでしかありえないことをカルナップが強調しているという点である。彼は、この手稿の冒頭と最後の二度にわたって、この点を強調している。彼は、クワインが本当に問題にしているのがどちらの分析性概念なのかははっきりしないと不満をもらしている。もしクワインが前者を問題にしているのであれば、意味論的体系がその厳密な定義を与えてくれるが、もし後者を問題にしているのであれば、それには、不正確で、不満足な形でしか応じることができない、というのが、カルナップの考えである。

次に、既にみたクワインの批判にカルナップがどう応じるかをみてみよう。クワインの

批判を繰り返そう。

ある言明が〔特定の人工言語〕 L において分析的であるのは、それが、具体的に列挙されたかくかくの意味論規則によって真であるとき、かつ、そのときに限る、ということ是可以する。しかし、…「〔文〕 S は L において分析的である」を変項 L に対して一般的に説明しようとするならば、(L を人工言語に限るとしてさえ)「 L の意味論規則によって真」という説明は無益である。なぜならば、「の意味論規則である」という関係名辞は、少なくとも、「において分析的である」と同じだけ明瞭にされる必要があるからである。⁽¹²⁾

カルナップはこの批判に対してどう答えるのか。次のようなカルナップの主張は注目に値する。

少なくともこれらの規則〔意味論規則〕のうちのいくつかが個々の言語体系それぞれに対してたてられなければならない、ということは確かに明らかなことである。このことはどの意味論的概念と構文論的概念に対しても当てはまる。もし、クワインの見解が、あらゆる体系に適用可能なひとつの定義が与えられるべきだという要求としていわれているならば、そういった要求は明らかに道理にあわないものである。それは、…意味論的概念に対しても構文論的概念に対しても満たされないし、また、満たされえない要求である。⁽¹³⁾

カルナップは、どんな人工言語に対しても当てはまるような、「分析性」の一般的な定義や説明を与えよなどというのは、無理な要求だと述べているのである。そのような一般性の要求を満たしていないのは、タルスキが定義した真理概念をはじめ、他の意味論的概念や構文論的概念も同様なのである。なぜクワインは、カルナップの分析性の定義を批判するのと同じ論拠で、タルスキの真理の定義をも批判しようとしないのであるか？

要するに、クワインに対するカルナップの返答は、こうである。我々は、あらかじめ、「分析性」という概念を、不正確なままではあるが持っている。そして、「意味論規則が我々に正確な概念を与えてくれる」のである。我々は、意味論規則に訴えることによって定義できる正確な概念（「 L -真」）と、我々が従来持っていた曖昧な概念（「分析性」）とを比較し、前者が後者の適切な解明項となっているならば、その定義を受け入れればよいのである。そして、カルナップは、「これまでに扱われた単純な、限定された体系に関して」⁽¹⁴⁾は、このような「解明」の試みが成功していると考えているのである。カルナップにとっては、「あらゆる体系に適用可能な」ひとつの定義が「分析性」という概念に対して与えられるべきだ、という要求は無理な要求なのである。⁽¹⁵⁾

クワインの批判に対して、カルナップは次のように述べることによって彼の返答をまとめている。「…分析的／総合的の区別は、常に言語体系、すなわち、明示的に定式化された規則によって組織された言語に関して、そしてそうした言語に関してだけ引かれうるものであって、歴史的に与えられた自然言語に関しては引かれえない」⁽¹⁶⁾。この主張から明らかのように、カルナップが念頭においているのは、人工言語だけなのである。カルナップ

二
二

にとっては、むしろ、人工言語に訴えることによってこそ、「分析性」という概念の明確な理解が得られるのである。このようにして、人工言語に訴えることによって「分析性」という概念に対する理解が得られるのか否か、という問題は、カルナップとクワインの間で完全に意見が分かれたままである。

2. 自然言語

カルナップとクワインの論争において、決着のつかないままに残された問題は、人工言語に訴えることが分析性という概念を理解するのに役立つかどうかという点であった。クワインの結論はこうである。

分析性の問題という観点からは、意味論規則を持った人工言語という概念は、とりわけひとを惑わすものである。人工言語の分析的言明を決定する意味論規則なるものが関心を引くに足るのは、分析性という概念が既に理解されている場合に限られる。それは、分析性という概念の理解を得るには何の助けともならないのである。⁽¹⁸⁾

「意味論規則なるものが関心を引くに足る」ために必要な、「既に理解されている」べき分析性概念とは、カルナップ流に言えば、被解明項の方の「分析性」のことに他ならないであろう。つまり、クワインは、そもそも被解明項の方の「分析性」とは一体何であるのかという点を、人工言語における「分析性 (L-真)」の定義に先立って、あらかじめもっと明確にしておくことが必要だと主張しているのである。クワインの考えでは、人工言語において定義される、解明項である分析性概念に関する議論は、結局は、その定義に先立って我々があらかじめ持っている、被解明項である分析性概念に関する問題に帰着するのである。

カルナップも、クワインが本当に問題視しているのは被解明項の分析性の方だ、という結論に達する。1955年に発表された「自然言語における意味と同義性」という論文の中で、彼は次のように述べる。

…意味論的内包概念に対応する語用論的概念を研究する動機には、さらにもうひとつのものがある。その理由は、そうした意味論的概念に対して提起される異論の中には、個々の提案された解明よりむしろ、被解明項だと称されているものの存在そのものの問題に関わるものがある、ということである。⁽¹⁹⁾

この引用においてカルナップが「意味論的内包概念」といっているもののひとつが、「L-真」という概念に他ならない。そして、それに対応する「語用論的概念」とは、被解明項たる「分析性」のことである。

もし、そもそもこの被解明項の「分析性」という概念が、とても擁護できないほど空虚なものであったらどうであろうか。その場合、カルナップの「解明」の試みそのものが意味のないものとなるのではないか。というのも、その場合、この解明の試みは、そもそも解明するに値しない概念を解明しようとする試みだということになってしまうからであ

る。これが、上の引用における、「非解明項だと称されているものの存在そのものの問題に関わる」異論である。つまり、それは、「そもそも解明するに足る被解明項などないのではないか」という異論である。この異論は、「個々の提案された解明」項に向けられたものではなく、それらの解明項が解明しようとしている被解明項そのものの方に向けられた異論である。

論文「自然言語における意味と同義性」から読み取れるのは、カルナップが、クワインの批判を、まさにこういった類の異論だと考えるに至った、ということである。カルナップは述べる。

とりわけクワインの批判は、純粹意味論における諸定義の形式的な正しさに関するものであるというより、むしろ、被解明項として役に立ちうるような何らかの明確で実り豊かな語用論的概念〔非解明項である分析性概念〕が意味論的概念〔解明項である「L-真」という概念〕に対応して存在するかどうかを疑っているのである。こういうわけで、こうした語用論的概念は、それに対する経験的、行動主義的基準を述べることによって、科学的に合法的であるということが示されるべきだということを、彼は要求しているのである。私〔カルナップ〕が彼を正しく理解しているとすれば、彼が信じているのは、意味論的内包概念〔「L-真」という概念〕は、たとえ形式的に正しいとしても、このような語用論的下部構造がなければ、恣意的であり目的を欠くということだと思う。⁽³⁰⁾

カルナップのこの主張からわかるのは、彼が、分析性概念に対するクワインの批判を、本質的には、被解明項の方の「分析性」に対する批判だと解するに至った、ということである。「被解明項の『分析性』概念が科学的に許容できるものでないのならば、人工言語に訴えた「L-真」の定義によるこの概念の解明という試みもそもそも無意味である」とクワインはいおうとしているのだ、とカルナップは解するわけである。

先に、カルナップの分析性概念の定義に対するクワインの批判は、タルスキの真理概念の定義に対しても全く同様に当てはまってしまうのではないか、という疑念を提示しておいた。この疑念はもっともなものであると思われる。しかし、いまの議論から、真理概念と分析性概念との間に、ひとつの違いをみいだすことが可能になる。クワインにとっては、両者は、次のような点で全く異なったものとみえていたのかもしれない。真理概念には、はっきりとした被解明項がある。解明されるべき真理概念は、例えば、タルスキのT図式によって、非常に明晰に規定できる。これに対し、解明されるべき分析性概念は、「意味による真理」などという、クワインからすればわけのわからない規定のされ方しかなされていないものである。ふたつの被解明項を比べると、後者はあまりにも不明瞭である。そこで、後者に関してのみ、「解明も結構だが、一体何を解明しようとしているのかをもっとはっきりさせてほしい」とクワインは言いたくなるのであろう。

こうして、結局問題は被解明項の分析性概念、すなわち、従来自然言語に対して適用されてきた分析性概念の問題に帰着する。そこでカルナップは、自然言語における分析性概念について彼がどう考えるかを論じ、クワインに応えようとするのである。カルナップは、クワインとの対立を打開するために、ここに新しい一步を踏み出す。カルナップは、

この対立の打開のために、いわば、クワインの議論の土俵にのるわけである。

カルナップは、「わたしは、意味論的概念が実り豊かなものであるためには、必ずそれに先立つ語用論的対応物を持っていなければならない、とは思わない」と一応は述べる。⁽²¹⁾しかし、彼はこれに引き続いて、「与えられた意味論的概念に対して、幾分あいまいではあるが、なじみの語用論的概念が既に存在し、その語用論的概念を、その適用に関する操作手続きを記述することによって明らかにできるならば、この方が、異論を論破する方法としてはより簡単であろうし、両方の概念に対して実践的な正当化を与えることとなろう」と述べる。⁽²²⁾そこで、次に、カルナップが自然言語における分析性をどう考えるかをみてゆくこととしよう。

2-1. カルナップと自然言語

カルナップは、論文「自然言語における意味と同義性」の目的を、「自然言語に対しての内包の分析は科学的な手続きであり、方法論的には外延の分析と同じく健全であるというテーゼを弁護すること」に据える。⁽²³⁾カルナップは、自然言語の表現に対して適用される「外延」という概念とそれに関連する概念（名指し、指示、表示、真理という概念）が「科学的に合法的であることに対しては、広く同意がある」とする。⁽²⁴⁾その上で、彼は、自然言語の表現に対する「外延」という概念に加えて、その「内包」という概念に関しても、科学的な合法性があるといえるかどうかを問う。この問いに対する彼の答えは「イエス」である。

カルナップがいう通り内包という概念が認められうるものであれば、この概念と血縁関係にある「分析的」という概念も擁護可能となる。「内包」とは、我々が通常何となく「意味」といっているものに対応する概念に他ならない。この概念が許容されうるものであることが示されれば、「内包（＝意味）によって真」を表す「分析性」も許容可能となるであろう。

自然言語の表現の内包を確定する、科学的に合法的な手続きが存在するというを示すために、カルナップは、ある言語について何も知らないひとりの言語学者が、その言語を話す人々の言語行動を観察することによって、その言語を研究しはじめる、といった状況を想定する。これはまさに、クワインの「根底的翻訳」の状況である。もっとも、カルナップの例では、この未知の言語は、ジャングル言語ではなく、「カール」なる人物の話すドイツ語であるが。また、カルナップは、「簡単のために」、議論を、“blau”や“Hund”のような、「観察可能なものに適用されうる述語」に限定する。

カルナップによれば、「内包」とは、表現の「理解」を与えるものであり、ものがその表現の外延に属するために満たされなければならない条件を規定するものである。従って、ことばを理解する通常のプロセスにおいては、我々はまず当のことばの内包を知った上で、そのことばの外延を確定することとなる。他方、未知の言語に対しては、これと逆のプロセスを採用しなければならない、とカルナップはいう。「言語学者が、以前には記述されていないような言語について経験的な探究を行なう場合には、彼は、第一にある種の対象が与えられた語によって表示されていることをみだし、そのあとで、その語の内包を確定する」。⁽²⁵⁾つまり、我々がカルナップとともに考えている未知の自然言語の場合には、まず外延の確定がなされ、次に内包の確定がなされるということになる。

従って、カルナップの答えるべき問いは、「仮に、その言語学者がある与えられた[自然言語の]述語の外延を確定できるとして、彼はどのようにして、これを越えて、その内包⁽²⁷⁾までも確定することができるだろうか」というものとなる。

2-1-1. 外延の確定

未知の自然言語（ここでは、ドイツ語）の述語の内包を確定する、科学的に認められる方法を示す前に、カルナップは、その外延の確定方法を概観する。「観察可能なものに適用されうる述語」の外延を確定するための科学的方法が存在するということについては、広く同意がある、とカルナップはいう。その方法について、カルナップは次のように述べる。「言語学者は、あるひとの自発的なあるいは引き出された発話に基づいて、そのひとが、ある与えられた述語をある与えられたものに適用しようとしているか否か、言い換えれば、その述語がそのひとにとってその与えられたものを表示するかどうかを確かめることができる」。カルナップがこのようにいうとき、彼は、言語学者が当の言語の話者（目下の例では、カール）に様々なものをみせて、その話者が問題の述語を当のものに対して適用するかどうかを確かめる、というテストを考えていると思われる。これは、クワインの根底的翻訳の第一段階の手続き（観察文の刺激意味を確定するための手続き——後述）に相当するであろう。ただし、カルナップにおいては、観察文という文ではなく、観察可能なものに適用される述語がテストの対象となっているという違いがある。

さらに、カルナップは、「このような種類の結果を集めることによって、言語学者は、第一に、述語[例えば]“Hund”の、カールにとっての、ある与えられた領域内における外延、すなわち、カールがその述語を適用しようとするものからなるクラスを確定し、第二に、それと矛盾する外延の確定、すなわち、カールが“Hund”の適用を否定するようなものからなるクラスを確定し、第三に、カールがそれに対してその述語を肯定も否定もしないようなものからなる、中間的なクラスを確定することができる」と述べる。カルナップのいう第一のクラスは、クワインのいうところの肯定的刺激意味に対応し、第二のクラスは、否定的刺激意味に対応する、ということができよう。ただし、ここでも、カルナップのいうクラスのメンバーが、話者に提示されたものそのものであるのに対して、クワインの刺激意味は、あくまで、話者に肯定や否定を促す刺激であるという重要な違いがある（刺激意味に関しては、後述）。

2-1-2. 内包の確定

さて、以上のようなテストによって、未知の言語の述語の外延が確定したとして、言語学者は、さらに進んで、どのように述語の内包までも確定することができるのであろうか。未知の言語のある述語の外延が確定したとしても、その述語に対して、様々な異なった内包を割り当てることが可能である。カルナップの例をみてみよう。二人の言語学者が、未知の言語（ここでは、ドイツ語）を彼ら自身の言語に翻訳する目下作成中の辞書に、外延を確定するためのテスト結果に基づいて、次のようにそれぞれ書き込んだとしよう。

言語学者 A の辞書……Pferd：馬

言語学者 B の辞書……Pferd：馬あるいは一角獣

一角獣は存在しないのであるから、どちらの翻訳に従っても、述語“Pferd”に割り当てられる外延は同じもの（つまり、馬からなるクラス）となる。しかし、“Pferd”に割り当てられる内包は、二つの翻訳で異なってくるであろう。この二つの翻訳のうちでどちらが正しいかを経験的に確かめる方法は存在するだろうか？

カルナップは、そうした方法を提示する。その方法のポイントは、言語学者が、「現実のケースだけでなく、可能的なケースをも考慮にいれ³⁰⁾」ればよい、というものである。つまり、言語学者は、カールが、馬に似ているが額に一本の角がはえているような、現実には存在しない可能的対象に対して、述語“Pferd”を適用する用意があるかどうかを確かめればよい、というわけである。このことを確かめるには、様々な方法がある、とカルナップはいう。ひとつは、カールに対して言語学者が発するドイツ語の質問の文の中に様相表現を用いる、というものである。また、様相表現を用いなくとも、「馬に似ているが額に一本の角がはえているもの」といった表現に相当するドイツ語の表現を、カールに向けられる質問文の中に用いる、という方法も考えられる。しかし、これらの方法は、未知の言語であるドイツ語のある部分を言語学者が既に使用できる、ということを前提にしている。そこで、カルナップは、単に、一角獣を表す絵をカールにみせるという方法も提案する。以上のような方法で、上の翻訳のどちらが正しいかを経験的に確定することができる、とカルナップは主張するわけである。

カルナップの言い方を借りれば、内包の確定のために必要なのは、「論理的に可能な場合がすべて考慮に入れられる³¹⁾」ということである。言語学者は、まず、問題となっている述語の外延に属する対象のいくつかを実例（見本、specimen）としてピックアップする。仮定により、述語の外延は既に確定しているのであるから、こうした実例をピックアップすることは可能である。そして、その実例とは、大きさ、色など、様々な性質の点で異なる対象を想定し、当の言語の話者に提示する。これらが、「可能的対象」である。そして、これらの対象のうちのどれに対して、当の話者が当の述語を当てはめる用意があるかをテストしていく。このテストによって、「その述語が当てはまる可能な限りの種類の対象を包括するところの、その述語の範囲³²⁾」が確定する。これをもって述語の内包としよう、というのが、カルナップの考えである。もともと、カルナップの立場では、述語の内包は、性質であるとみなされていた。ここでは、そうした性質が、当の述語が適用される、可能的対象までもを含めた対象からなるクラスに置き換えられているわけである。

これまでの考察から得られる結論は、カルナップによれば、次のようなことである。

…ある話し手、例えばカール、にとつてのある述語、例えば“Pferd”、の内包に関する仮説を、言語行動を観察することによってテストする経験的手続きが存在する。この種の手続きは内包についてのいかなる仮説にも適用可能であるから、任意の時点における任意の人物にとつての任意の言語の任意の述語の内包³³⁾という一般概念は、明確で、経験的にテスト可能な意味を持っている。

クワインは、表現の意味を決定づけるものがあるとしたら、それは話者の言語行動の他にはない、と一貫して考えている。ここで注目すべきは、カルナップが提示する内包の確定方法もまた、専ら、話者の言語行動を観察することのみに基づいているということであ

る。言語行動のみを基礎に置くという点で、自然言語の意味に関する両者の議論は一致しているのである。

これまでみてきたような方法で内包が確定可能であるということを前提として、カルナップは、「分析性」という概念を次のように規定する。

文が、(時刻 t において、) 人物 X にとって、言語 L において分析的であるのは、(t における、) X にとっての、 L におけるその内包 (あるいは、範囲、あるいは、真理条件) が、あらゆる³¹ 可能的なケースを包括するときである。

このようにして、いったん内包という概念が認められれば、それに基づいて、自然言語に関する分析性という概念を規定することができるわけである。

2-2. 不確定性説の登場

当初、人工言語の文に対して定義された「 L -真」という概念をもって「分析性」という概念を「解明」することによって、この概念を擁護することができると考えていたカルナップは、クワインの批判を、人工言語に訴えることによって解明されるべき、被解明項の存在そのものにかかわる批判と解した。そこで、彼は、「自然言語における意味と同義性」において、自然言語の諸表現の外延のみならず、内包をも確定する科学的方法が存在することを示し、解明するに足る被解明項が存在するということを主張しようとした。他方、クワインは、翻訳の不確定性テーゼによって、「自然言語における意味と同義性」におけるカルナップの議論の設定と基本的には同じ設定のもとで、翻訳が確定しないということを示そうとしたということができる。つまり、翻訳の不確定性テーゼは、カルナップとクワインの論争の文脈において、「自然言語における意味と同義性」でのカルナップの主張に対するクワインの批判的反応とみなすことができるのである。

カルナップとクワインは、基本的に同じ前提のもとで、正反対の結論を導き出した。ただし、「基本的に同じ前提」といっても、そこには重要な違いも存在する。その違いは、カルナップに比べて、クワインの方が、その前提を詳しく吟味したことによって生じたのである。この違いを確認しつつ、不確定性説が「自然言語における意味と同義性」でのカルナップの主張に対するアンチテーゼとなるということをみてゆこう。

2-2-1. 議論の設定

自然言語の表現の外延と内包とがともに確定すると主張するカルナップと、翻訳が確定しないと主張するクワインとが、各々の主張を導き出すための議論において設定した状況は同じである。既にみたように、それは、全く未知の言語の翻訳を企てるという状況、クワインの用語でいう「根底的翻訳」という状況である。

また、言語表現の「意味」を確定するために採られるべき方法として両者が挙げるものも、基本的には同じである。その方法はあくまで当の言語の話者の言語行動を観察することに基づくべきだ、と考える点で、両者は一致しているのである。言語表現の意味の確定に関しては行動主義的アプローチ以外に採るべき道はない、というわけである。

カルナップは、彼の議論を、「観察可能なものに適用されうる述語」の翻訳の場面に限

定していた。それは、彼の場合、単に「簡単のため」であった。しかし、「根底的翻訳」の場合、実際上まさにこのように、未知の言語の諸表現のうちでも「観察可能なものに適用されうる」何らかの表現の意味を確定するところから翻訳作業を始める以外に道はないはずである。相手にしているのは、全く未知の言語である。いま目の前にあるものやいま目の前で起こっていることとの間にはっきり対応関係がみとれるような表現以外に、どの表現から翻訳を開始できようか。クワインはこのことに自覚的であり、「[翻訳を企てている]言語学者と情報提供者[未知の言語の話者]の双方の目につくような、目の前で起きている出来事に結びついた発話」——カルナップの言い方では、「観察可能なものに適用されうる」表現——の翻訳を、根底的翻訳の第一段階に据える。

カルナップは、「様々なものを当の言語の話者に提示し、それに対して問題の述語が適用されるかどうかをテストする」方法の詳細を述べていない。これに対してクワインは、根底的翻訳の第一段階において採るべき方法を、カルナップよりも詳しく考察している。考えられているのは、全く未知の言語の翻訳の、しかも第一段階なのであるから、言語学者は、当の言語の諸表現を自由に用いて現地人に質問をするわけにはいかない。現地語のある表現が馬を意味するのか、それとも馬と一角獣を意味するのかを確かめるために、「馬と似ているが額に一本の角がはえているもの」という表現に相当する現地語の表現を用いて、現地人に質問をするわけにはいかないのである。

では、どうすればよいのか？例えば、うさぎが目の前を通り過ぎたとき、現地人が「ギャバガイ」という音声を発したとする。このとき、言語学者は、「ギャバガイ」が「うさぎだ」といったことを意味するということを、どのようにして確定できるであろうか。クワインは、このことの確定のためには、どうしても、「イエス」「ノー」に相当する現地語の表現（同意を表す現地語の表現と、不同意を表す現地語の表現）が何であるかが言語学者にわかっている必要があると考える。このことがわかれば、言語学者は次のような方法を探ることができる。言語学者は現地人にうさぎやうさぎ以外のものを提示し、自ら「ギャバガイ」という音声を発してみる。そして、現地人がそれに対し「イエス」に相当する表現を口にするか「ノー」に相当する表現を口にするかを観察するのである。クワインが挙げるこの方法は、カルナップが述べていた方法をより厳密に規定したものというであろう。

2-2-2. 述語か文か

カルナップの場合、未知の言語の「観察可能なものに適用されうる述語」が翻訳の対象として取り上げられていた。しかし、クワインにおいては、根底的翻訳の第一段階において取り上げられるべき、「観察可能なものに適用されうる」未知の言語の表現は、述語ではなく、クワインが「観察文」と呼ぶ文である。現地人の発する「ギャバガイ」は、観察文の一例である。「観察文」とは、その場その場の観察可能な状況（正確には、刺激）に促されて同意ないしは不同意される文のうちでも、そうした状況とその文との対応関係が、最もはっきりとしている文である。

「ギャバガイ」の翻訳を確定する方法は、言語学者が現地人に様々なものをみせ、自ら「ギャバガイ」と発話し、現地人が「イエス」に相当することばを発するか否かを確認する、というものであった。ところで、発話の単位は文であり、それに対して「真とみなす」と

いう態度がとられる（それに対して「イエス」という発話がなされる）言語の単位は文である。従って、「ギャバガイ」の翻訳の確定方法として、いま述べたようなものが採られるのならば、「ギャバガイ」は述語ではなく、クワインが考えているように、文とみなされるべきである。カルナップが「観察可能なものに適用されうる述語」の翻訳の確定方法とみなしたものが、実際には、クワインが述べているような形を採らざるをえないのだとすると、その方法によって翻訳がなされるべき未知の言語の表現は、実は、カルナップが考えていたように、述語なのではなく、（観察文という）文なのである。クワインによれば、述語のような、単語のレベルの翻訳は、根底的翻訳のもっとあとの段階で初めて可能になることなのである。

2-2-3. ものそのものか刺激か

さて、このようなテストによって、その提示とともに「ギャバガイ」という文が発話されたときに現地人が「イエス」と答えるような「もの」の集合が確定したとしよう。カルナップによれば、この集合が「ギャバガイ」の外延となる。だが、クワインによれば、「ギャバガイ」に対応されられるべきものは、「ギャバガイ」という文が発話されたときに現地人が「イエス」と答えるような「もの」の集合ではない。クワインによれば、「ギャバガイ」に対応させられるべきものは、現地人に提示された「もの」そのものではなく、その「もの」によって現地人の感官に与えられた「刺激」である。「『ギャバガイ?』に対して同意する[『イエス』と答える]ように現地人を促すものは、うさぎ[というもののもの]ではなく刺激である、と考えることは重要である」とクワインは主張する。というのも、「うさぎをうさぎの模造品にすりかえてみても、刺激は同一でありうる」し、また、「うさぎ自体は変化しなくとも、[うさぎをみる]角度、光のあたり具合、色のコントラストが変わると、『ギャバガイ』への同意を促す力の点で、刺激は変化しうる」からである。従って、クワインは、「『ギャバガイ』の使用は『うさぎだ』の使用に相当する」と試験的に考える際、突き合わせるべきものは刺激であって、動物[そのもの]ではない」と結論する。クワインは、観察文に対応されるべきこうした刺激を、目の網膜への色彩照射パターンとする。

こうして、クワインによれば、根底的翻訳の第一段階において言語学者が得ることのできるものは、観察文に対応する刺激である、ということになる。彼は、これが、翻訳に際して（従って、言語表現の「意味」を確定するに際して）、言語学者が客観的に獲得することのできるもののすべてである、と考える。つまり、こうした刺激こそが、客観的に存在している「意味」のすべてなのである。こうして、クワインは、ある観察文に対応している刺激を、その観察文の「刺激意味」と呼ぶ。

現地語の観察文Sの刺激意味と我々の言語の文S'の刺激意味とが一致したとしよう。刺激意味とは、我々が通常「意味」と呼んでいるものを物理的に特定したものに他ならないのだから、この場合、SをS'と翻訳することは正しいといえる。そこで、クワインは、観察文は翻訳可能である、と結論する。

これまでみてきたように、クワインの議論は、カルナップが「自然言語における意味と同義性」において示した思考実験をより厳密に、詳しく展開し、それに修正を加えたものであるといえる。

2-2-4. 不確定説

観察文「ギャバガイ」が文「うさぎだ」と翻訳可能であるからといって、名辞としての「ギャバガイ」が「うさぎ」と翻訳されるということが確定するわけではない。文「ギャバガイ」が「うさぎだ」と翻訳可能なのは、二つの文の刺激意味が一致し、従って、(どのような刺激が与えられたときに同意がなされるかという点に関して二つの文が一致する、という意味で)二つの文の用いられ方が一致するからである。しかし、文「ギャバガイ」の刺激意味は、その刺激のさらに向こう側にある世界の事物のどれを名辞としての「ギャバガイ」が指示するかまでも決定するものではない。名辞としての「ギャバガイ」が何を指示するかという問題は、文「ギャバガイ」の刺激意味とは独立なのである。名辞「ギャバガイ」は、うさぎを指示するかもしれないし、「うさぎ相(うさぎの短時間の諸断片)」を指示するかもしれないし、「うさぎの切り離されていない諸部分」を指示するかもしれないし、「うさぎ性(という普遍者)」を指示するのかもしれない。どの選択肢も、文「ギャバガイ」の刺激意味が、文「ギャバガイ」に対応するということと両立可能である。文「ギャバガイ」の刺激意味は、これらの選択肢のどれに関しても、その可能性を排除しないのである。

もし、言語学者が、「このギャバガイはあのギャバガイと同一であるか」と現地語の表現で現地人に問うことができれば、名辞「ギャバガイ」が、うさぎを指示するか、それともうさぎ性を指示するのか、等々を決定することができる。「あのギャバガイ」に相当する現地語の表現によってあるうさぎを指し、「このギャバガイ」に相当する現地語の表現によって、それとはまた別のうさぎを指すことができたでしょう。その場合、もし「ギャバガイ」がうさぎ性を指示するのであれば、現地人は、「このギャバガイはあのギャバガイと同一であるか」という問いに対して同意し、また、もし「ギャバガイ」がうさぎを指示するのであれば、現地人は、(一匹のうさぎを同定する能力があれば)この問いに対して不同意するであろう。しかし、このような質問が可能なのは、言語学者は、「この」「あの」「同一である」といった表現に相当する現地語の表現がどれであることを前もって知っているのではなくてはならない。しかし、それがどれであるかということもまた、刺激意味からは確定されないことなのである。

つまり、不確定説によれば、一般に、たとえ観察文の翻訳が確定したとしても、名辞の指示(名辞の外延)は不確定であり、従って、この段階で既に翻訳は不確定となるのである。カルナップは、少なくとも、「観察可能なものに適用されうる述語」に関して、その外延と内包は確定すると主張していた。こうして、不確定説は、このカルナップの主張に対するアンチテーゼとなるのである。クワインは次のように述べる。

ラッセルは、彼が「対象語」と呼ぶものを事実上場面文と考えていたが、カルナップと同様、目下の要点、すなわち、ある語の場面文としての使用がいかに確定的であっても、それは名辞としてのその語の外延を固定するものではない、ということに気づいてはいなかった。^(註)

この引用における「場面文」は、目下の我々の議論のためには、「観察文」に置き換えて読まれてよい。また、「場面文(観察文)の使用が確定的」であるとは、實際上、場面

文の刺激意味が確定するというに他ならない。つまり、クワインは、上の引用において、「ある観察文の刺激意味がどんなに確定していたとしても、その文を名辞としてみたときのその名辞の指示は確定しない、ということにカルナップは気づいていない」と主張しているわけである。

3. 結論

カルナップとクワインの分析性概念をめぐる論争の第一の争点は、人工言語に訴えることによってこの概念を解明するという試みに意味があるか否か、ということにあった。この点に関して、両者の意見は食い違ったままである。

カルナップは、クワインの批判を、本質的には、自然言語の文に対して適用されてきた、被解明項としての分析性概念に対する批判であるとみなした。そこで彼は、自然言語の諸表現の内包を確定するための科学的手続きが存在するということを示そうとした。そして彼は、その手続きによって保証される内包概念に基づいて、自然言語に対する「分析性」という概念をも合法的に受け入れることができると主張した。こうした議論の際、彼は、言語学者が未知の言語の翻訳を企てるという、仮想的な場面を設定した。クワインは、カルナップがしたのと全く同じ場面設定の下で、カルナップとは正反対の結論が、つまり、翻訳は確定しないという結論が導かれるということを示すことによって、カルナップの主張を批判したのである。クワインは、カルナップよりも、この「根底的翻訳」の第一段階という場面を、より厳密に吟味した。このことによって、カルナップとクワインの議論に違いが生じてくる。ポイントは、次の三点にある。

1. 根底的翻訳の第一段階においては、未知の言語の諸表現のうちで言語学者が（質問などのために）使用できるものは、非常に限られている。
2. この段階において翻訳可能となる未知の言語の表現は、述語ではなく、観察文という文である。
3. 観察文に対応させられるべきものは、ものそのものではなく、刺激である。

この三点が、クワインにカルナップとは正反対の結論を、すなわち、翻訳は確定しないという結論を導き出させる要因となったのである。このようにして、カルナップ・クワイン論争が行き着いた果てに、翻訳の不確定説は位置しているのである。しかも、この説は、内包ばかりではなく、名辞の外延までもが確定しないという、より強い主張までも含んでいたのである。

注

- (1) Cf. Creath [1990], pp. 27-8.
- (2) 『ことばと対象』がカルナップとの対決の中で結晶したものであり、カルナップ哲学との対比のもとで読まれるべきだということは、この書がカルナップに捧げられているということの中にも示されている。
- (3) Carnap [1956], pp. 7-8.

- (4) Carnap [1956], p. 10.
- (5) Carnap [1942], p. 32.
- (6) Carnap [1956], p. 10.
- (7) Cf. Carnap [1942], § 16.
- (8) Quine [1998], p.16. しかし、Creath [1990], pp. 27-8 には、興味深いことが書かれている。若きクワインは、ヨーロッパにカルナップを訪ね、二人は1933年、プラハではじめて対面する。そこでクワインは、『言語の論理的構文論』の原稿をカルナップにみせてもらう。クワインは、カルナップの妻、イナのタイプライターから打ち出されてくる原稿を、まさにその場で、1 ページ 1 ページ手にとって読んだのだという。そのときのクワインの感想について、クリースは次のように書いている。

驚くべきことに、クワインのまさしく最初の反応（それは、カルナップが書いた、短い速記メモに残されているのであるが）には、未熟な形でではありながら、この問題〔分析性の問題〕に関する彼の見解全体が〔既に〕含まれている。——算術の（分析的）公理と物体に関する（総合的な）経験的主張との間の違いは、程度の違いなのではないであろうか？ そうした程度とは、考察中の様々な信念を放棄してもよいと思う、我々の相対的な気持ちを反映しているのではないか？ 彼はこう思ったというのである。

クリースによれば、なんと、クワインは、分析的／総合的の区別に関するカルナップの学説を最初に読んだときに、もう既にこの区別に対して疑問を感じたわけである。分析性に関するカルナップの学説へのクワインの疑念は、実は、彼が初めてそれを目にしたまさにその瞬間にまでさかのぼることができるわけである。

- (9) こうした歴史的経緯に関しては、Creath [1990], p.22ff. を参照。また、ハーヴァードでの議論に関しては、Carnap [1963], pp.35-6 も参照。こうした経緯から、クワインの主著『ことばと対象』は、『意味と必然性』との対比で読まれるべきだということがわかる。カルナップのクワインへの返答が一冊の書物にまでなってしまったのが『意味と必然性』であり、また、クワインのカルナップへの批判は『ことばと対象』へと結実したからである。
- (10) Quine [1951], p.34.
- (11) 「ふたつのドグマ」第4節での論述をみると、『真理の規則』とはどのような規則であるかに関して、クワインに多少の誤解があるように見受けられる。人工言語の真理の規則とは、その言語に属する真なる言明のうちのいくつかを特定する規則である、というのが、そこでのクワインの理解である。つまり、クワインの理解では、真理の規則とは、「かくかくの言明が真なる言明の一部に含まれると述べる」(Quine [1951], p.34) ものである。しかし、カルナップのいう真理の規則は、そういったものではない。このような誤解がクワインの側にあるので、そこでのクワインの批判は微妙に的の外れた批判になっている可能性がある。しかし、この点は、以下の議論に関する限り、特に気にする必要はない。以下でみるカルナップの返答は、クワインの批判のもっと大きな枠組み自体に関わるものだからである。
- (12) Quine [1951], p.34.
- (13) Carnap [1952], p.430.
- (14) Carnap [1952], p.431.
- (15) *Ibid.*
- (16) これは、カルナップが、どんな言語にも適用可能な一般意味論の構築を重要課題と考えていたという、既にみた点と矛盾すると思われるかもしれない。この点に関しては、次のように考えることができる。すべての人工言語に当てはまるような「分析性」の定義を最初から一挙に手に入れようなどと

というのは、無理な話である。「研究の現段階で我々の望みうる最善の策は、カルナップがしたようにすること——すなわち、非常に単純な構造をもった言語だけに注意を限定することである。望みは、もちろん、我々の「単純な言語に対して得られた分析性の」定義がずっと複雑な言語にまで拡張できるということである。しかし、これが成功裏になされるかどうかは、将来の研究の課題である」(Martin [1952], p.45)。我々は、まずは単純な言語を相手にし、次により複雑な言語にまで守備範囲を広げてゆくことによって、だんだんと一般性を獲得してゆくしかない。この考え方からすれば、正当な手順を踏んでいるのはカルナップの方であり、最初から一挙に一般的な定義を与えよというクワインの要求は、あまりにも性急で無理な要求だと思われるであろう。

- (17) Carnap [1952], p.432.
- (18) Quine [1951], p.36.
- (19) Carnap [1955], p.234.
- (20) Carnap [1955], pp.234-5.
- (21) Carnap [1955], p.235.
- (22) *Ibid.*
- (23) Carnap [1955], p.236.
- (24) Carnap [1955], p.235.
- (25) *Ibid.*
- (26) Carnap [1955], p.234.
- (27) Carnap [1955], p.236.
- (28) Carnap [1955], p.235.
- (29) *Ibid.*
- (30) Carnap [1955], p.238.
- (31) Carnap [1955], p.239.
- (32) *Ibid.*
- (33) Carnap[1955], p.242. もちろん、カールの言語の諸表現の外延と内包とに関して言語学者が打ち立てる説は、あくまでも「また、どこまでいっても」経験的仮説に過ぎない。つまりそれは、新たな証拠の出現によって変更を余儀なくされることがありうる。しかし、この点は、通常の科学理論の場合も全く同様である。
- (34) Carnap [1955], p.243.
- (35) Quine [1960], p.29.
- (36) Quine [1960], p.31.
- (37) *Ibid.*
- (38) *Ibid.*
- (39) *Ibid.*
- (40) 刺激意味という概念は、厳密には、次のように規定される (Cf. Quine [1960], pp.32-3)。クワインは、まず、「肯定的刺激意味」という概念を、次のように定義する。

話者の同意を促すであろう刺激(直前直後に適当な時間的遮断がなされた、展開しつつある視覚上の照射パターン)すべてからなるクラス

より詳しくいえば、

ある話者にとって、刺激 σ が文Sの肯定的刺激意味に属するのは、まずその話者に刺激 σ' が与えられて文Sが問われてもそれに同意しないであろうが、そのあとで刺激 σ が与えられて文Sを再び問われたならば、それに同意するであろうような刺激 σ' が存在するとき、そのときに限る。

「否定的刺激意味」の定義は、この「肯定的刺激意味」の定義にあらわれる「同意」という表現を「不同意」という表現に置き換えることによって得られる。ある観察文の「刺激意味」は、その観察文の肯定的刺激意味と否定的刺激意味との順序対として定義される。

- (4) 実際、クワインは、Quine [1960], p.35において、「自然言語における意味と同義性」でのカルナップの思考実験と自らの根底的翻訳の議論との比較をおこなっている。そこにおいてクワインは、両者の相違点を指摘しつつも、「…刺激意味というわたしの概念それ自体は、[カルナップと]同一の方向でのいっそうしっかりとした定義となる」と述べている。クワインが指摘している「相違点」とは、根底的翻訳の第一段階においては、

- (1) 現地語を自由に用いて現地人に質問をすることによって、現地語の表現の意味に関する判断を現地人自身にゆだねることは出来ない、
- (2) 翻訳の対象になる現地語の表現は「述語のような」語ではなく文である、

という点である。

- (42) Quine [1960], p.53.

文献

Carnap, R.

[1942]: *Introduction to Semantics*, Harvard Univ. Press, Cambridge Mass.

[1952]: 'Quine on Analyticity' in Creath [1990], pp.427-32.

[1955]: 'Meaning and Synonymy in Natural Languages' in Carnap [1956], pp.233-47.

[1956]: *Meaning and Necessity: A Study in Semantics and Modal Logic*, 2nd edition, The Univ. of Chicago Press, Chicago.

[1963]: 'Intellectual Autobiography' in *The Philosophy of Rudolf Carnap*, ed. by Schilpp, P.A., Open Court, La Salle, pp. 1-84.

Creath, R.

[1990]: (ed.) *Dear Carnap, Dear Van: The Quine-Carnap Correspondence and Related Work*, Univ. of California Press, Berkeley.

Martin, R.M.

[1952]: 'On Analytic' *Philosophical Studies* 3, pp.42-7.

Quine, W.V.

[1951]: 'Two Dogmas of Empiricism' in Quine [1953], pp. 20-46.

[1953]: *From a Logical Point of View: Nine Logico-Philosophical Essays* (2nd ed. revised, 1980), Harvard Univ. Press, Cambridge Mass.

[1960]: *Word and Object*, The MIT Press, Cambridge Mass.

[1998]: *The Philosophy of W.V. Quine*, 2nd, expanded edition (1st ed. 1986), ed. by Hahn, L.E. & Schilpp, P.A., Open Court, La Salle.

Carnap versus Quine

——What was the issue of their controversy? ——

Masatoshi NAKAMURA

W. V. Quine, who had been an enthusiastic follower of R. Carnap's philosophy, threw doubt on the analytic/synthetic distinction. Quine insisted in his "Two Dogmas of Empiricism" that the concept of analyticity be dismissed altogether. Carnap reacted against Quine's attack. The problem the present paper deals with is: what was the real issue of their controversy over analyticity? This paper tries to make clear the following three points.

(1) Carnap and Quine have deeply divided opinions on whether appealing to an artificial language is useful in understanding the concept of analyticity. Carnap holds that the analytic/synthetic distinction can be drawn with respect to an artificial language, namely, a language organized according to explicitly formulated linguistic rules. On the other hand, Quine argues that appealing to an artificial language is of no help in gaining understanding of analyticity.

(2) Carnap insists that the concept "analyticity in natural languages" is acceptable, too. He argues that both extensions and intensions of expressions can be determined in the case of what Quine calls radical translation. If his argument is correct, we will be able to define analyticity with respect to natural languages on the basis of the concept of intension. Quine, however, made an objection to Carnap's argument.

(3) The objection Quine raised against Carnap's argument about radical translation is his doctrine of the indeterminacy of translation. This well-known doctrine is a direct outcome of the Carnap-Quine controversy.